

W-5-3 英語学習者の副詞使用の特徴: 日本語学習者の特徴との比較

眞野 美穂(大阪大学)

1. はじめに

本発表では、ICNALE (The International Corpus Network of Asian Learners of English)の Spoken Dialogue のうち、絵描写課題のデータを中心に、発表①、②で観察されたような特徴が、中国語・韓国語・日本語母語話者が英語を学ぶ際にも観察されるかを探る。そのため、まず注目するのは、評価副詞 (stance) の使用と、使用される副詞の種類である。目標言語の異なる学習者の表現で観察される特徴を比較することで、母語の影響の有無、学習者特有の特徴の有無などについて検討する。

2. 先行研究の概観

2.1. 学習者コーパスに基づいた英語学習者の副詞使用について

学習者コーパスを使用した英語学習者の副詞使用については、これまでも研究が行われてきた。投野 (2007)は、JEFLL (Japanese EFL Learner) コーパスを使用し、中高校生の日本語母語英語学習者の作文において、副詞の使用は 4%程度であること、程度副詞 (degree)の使用が最も多く、接続副詞 (linking)の使用は稀であることを指摘している。また、Ogata & Kawamura (2014)は、ICNALE を使用し、基本的な前置詞と *-ly* 副詞の使用について、学習者の作文データを調査し、使用傾向はグループ毎に異なること、そして学習者は態度や評価 (stance)を表すのが難しいことを指摘している。

2.2. 英語学習者の評価副詞の使用

評価副詞に関して藤本 (2017, 2018)は、英語学習者の書き言葉コーパス The Longman Learners' Corpus (LLC)の日本人データと母語話者データ (American English 2006)を使用し、*maybe* などの認識的モダリティ (epistemic modality)を表す副詞(句)、*mainly* などの主張の制限 (epistemic stance)を表す副詞(句)の使用を比較し、語ごとの使用頻度の違い、使用方法の違いについて指摘している。また、Gablasova et al. (2017)は、態度や評価 (epistemic stance)を表す表現についての第二言語研究のほとんどが書き言葉を扱うものであることを指摘し、The Trinity Lancaster Corpus of L2 production の話し言葉データを調査し、様々な母語の上級英語学習者の表現を比較している。その結果からタスクの影響、話者個人のスタイルなどが複雑に影響していることを指摘している。

2.3. 残された課題

このように、学習者の副詞の使用については、コーパスを使用した研究が行われつつあるが、様々な母語を持つ学習者間の副詞使用の双方向的比較は未だ不足している。しかし、それらなしには、母語の影響と、学習者特有の傾向の区別が難しい。日英語学習者の特徴を比較し、多角的に検討する必要がある。

3. 調査 1(絵描写課題)

3.1. 調査方法

発表①と②の日本語学習者のデータと比較するため、まずは I-JAS のストーリーテリングタスクに類似した課題である「絵描写」課題の発話データを対象に英語学習者の調査を行う¹。調査方法は以下の通りである。調査に使用したコーパス: ICNALE, Spoken Dialogue V1.3²

表 1. 調査対象者と参加者数 (調査1)

対象者		習熟度	B1-1	B1-2	B2	合計
学習者	中国語 (CHN)		11	17	19	47
	韓国語 (KOR)		3	7	10	20
	日本語 (JPN)		29	28	12	69
英語母語話者 (ENS)						20

検索対象: Picture description main task (PD1, PD2)

2つのトピック(アルバイトと喫煙)についてのイラストを見て³、それを口頭で描写するタスク

検索方法と分析対象: The ICNALE Online (V5.3)を使用し⁴、副詞を品詞指定し([a*])、抜き出したデータから手作業で次のものを取り除き、分析対象とした。

- 1) 否定語 (not, n't, no), 2) 接続副詞 (接続詞を含む) (so, therefore, but, however, and⁵),
- 3) 感嘆詞、間投詞 (okay, well, um, yeah, yes), 4) 関係副詞 (where, why),
- 5) その他 (補文標識の that, 言い直した前置詞など、副詞ではないもの)

3.2. 英語学習者の副詞使用の特徴

3.2.1. 英語学習者の副詞の使用状況

まず、全体的な特徴を探るため、学習者および母語話者で観察された副詞の延べ語数、一人当たりの平均出現頻度と、異なり語数を次頁の表 2 に示す。ただし、(1)のような言い直しや、誤用に関してもそれぞれ数えられている。

- (1) a. then the man **quickly** ---**quickly** put off the fire of, put off the fire... (JPN, SMK)
- b. smoking, and the _ and then the child is **very**_ is very smoked _ is smoked... (CHN, SMK)

これらの結果から、英語母語話者 (ENS) の方が学習者よりも副詞の使用が多く、異なり語数も多いことがわかる。英語学習者の中では CHN が最も副詞を使用しており、JPN は副詞の平均出現頻度および異なり語数共に、他の学習者より目立って低いという特徴が観察された。また、必ずしも習熟度が上がるにつれて規則的な変化をするわけではないことも見てとれる。

¹ 学習者の習熟度は CEFL に対応するが、その判定方法の詳細は、Ishikawa (2023)および ICNALE website (<https://language.sakura.ne.jp/icnale/>) を参照されたい。

² Spoken Dialogues は学習者と教師(インタビュアー)による約 30–40 分の半構造化された口頭インタビューの対話データであり、10 種類のタスクが含まれている(Introduction, Picture Description (PD) 1, PD1-related QA, Role-play (RP) 1, RP1-related QA, PD2, PD2-related QA, RP 2, RP2-related QA, and Reflection)。詳しくは、Ishikawa (2023)および ICNALE website (<https://language.sakura.ne.jp/icnale/modules.html#2>) を参照。

³ イラストは 6 つの場面から構成され、上部には、“A few weeks ago...” と記載されている (Ishikawa 2023)。

⁴ ただし、ENS と JPN の喫煙トピックに関しては、オンライン版の検索で用例がヒットしないという不具合が生じたため、ダウンロード版を使用し、手作業で副詞の抜き出しを行った。

⁵ 連結 (linking)に関する副詞の中でも、これらの接続副詞および接続詞は、どの話者においても多数観察された。また、接続詞については、文頭での使用や繰り返しの使用もそれぞれ副詞としてタグ付けされている。

表 2. 各話者データで観察された副詞の延べ語数と異なり語数 (調査 1)

対象者	CHN			KOR			JPN			ENS	
学習者の習熟度	B1-1	B1-2	B2	—	B1-1	B1-2	B2	B1-1	B1-2		
人数	11	17	19	20	3	7	10	29	28	20	
トピック	PTJ	75	96	84	78	9	28	36	77	87	84
	SMK	84	88	151	101	15	26	41	75	71	151
合計	159	184	179	235	24	54	77	152	158	235	
一人当たりの平均出現頻度	14.45	10.82	9.42	11.75	8.0	7.71	7.7	5.24	5.64	11.75	
	11.11			7.75			5.75				
異なり語数 (2トピック合計)	37	37	36	70	9	17	25	23	29	70	
	69			34			46				
一人当たりの平均異なり語数	3.36	2.31	1.89	3.5	3.0	2.42	2.5	0.79	1.04	3.5	
	1.47			1.7			0.67				

表 3 は、出現数の多い副詞、上位 10 語までを示したものである。実際使用された副詞のうち、高頻度のものについては、対象者間で共通するものが多いことが分かる(ago については、注 3 が関係)。

表 3. 出現数上位 10 語の副詞 (調査 1)

CHN				KOR				JPN				ENS (英語母語話者)			
	副詞	出現数	割合		副詞	出現数	割合		副詞	出現数	割合		副詞	出現数	割合
1	then	121	23.2%	1	ago	38	24.5%	1	ago	135	34.0%	1	ago	38	28.1%
2	ago	92	17.7%	2	then	23	14.8%	2	then	113	28.5%	2	then	35	25.9%
3	very	52	10.0%	3	very	16	10.3%	3	there	27	6.8%	3	very	20	14.8%
4	finally	25	4.8%	4	there	12	7.7%	4	finally	17	4.3%	4	out	12	8.9%
4	here	25	4.8%	5	suddenly	6	3.9%	5	very	13	3.3%	5	over	8	5.9%
6	there	20	3.8%	5	finally	6	3.9%	5	here	13	3.3%	6	later	6	4.4%
7	just	17	3.3%	5	really	6	3.9%	7	soon	8	2.0%	7	really	5	3.7%
8	maybe	15	2.9%	5	just	6	3.9%	8	maybe	6	1.5%	8	up	5	3.7%
9	really	12	2.3%	9	hard	4	2.6%	9	again	4	1.0%	8	there	5	3.7%
10	later	10	1.9%	10	also	3	1.9%	9	close	4	1.0%	8	immediately	5	3.7%
10	now	10	1.9%	10	immediately	3	1.9%	9	also	4	1.0%	8	back	4	3.0%
				10	later	3	1.9%	9	much	4	1.0%				
				10	quite	3	1.9%								
				10	right	3	1.9%								
				10	maybe	3	1.9%								

3.2.2. 評価副詞の使用

次に、発表①で指摘された「日本語学習者にとっては、話し手の評価・感情を表す副詞の産出は難しく、産出されるようになって、出現頻度、種類ともに少ない」という特徴が観察されるのかについて、検討する。

英語における副詞の分類に関しては、様々な提案が行われているが、本発表では、以下にまとめるような Biber et al. (2021: 548-556) の分類に基づき、分析を行う。ただし、判断に迷うものは「その他」に含めた。

- ・ 場所 (Place): 場所や方向、距離を表すもの。e.g. *there, far, backward, far*
- ・ 時間 (Time): 時間的な位置、頻度、期間、関係を表すもの。e.g. *now, often, recently, already*
- ・ 様態 (Manner): どのように行為が行われるかの情報を示すもの。e.g. *happily, fast, well, carefully*
- ・ 程度 (Degree): 程度を表すもの。e.g. *slightly, almost, very, extremely, somewhat, quite*
- ・ 追加・制限 (Additive/restrictive): 追加や限定を行うもの。e.g. *too, also, especially, only*

- ・ 評価 (Stance): 認識や態度、表現様式の立場を示すもの。e.g. *probably, really, unfortunately*
- ・ 連結 (Linking): 談話上の意味的なつながりを示すもの。e.g. *secondly, therefore, overall*
- ・ その他 (Other meanings): その他。e.g. *symbolically, angiographically*

このうち、発表①で対象としている日本語の「叙法副詞」に対応するものとして、英語の態度や評価 (stance)を表す副詞を対象とし、その使用傾向を見ていく(ただし、定義や範囲は異なる)。

得られた評価副詞の延べ語数は表 4 に示す通りであり、観察された副詞は(2)に示している(()内は出現数)。ENS も含め全体的に評価副詞の出現頻度は低く、JPN を除き、差は少なかった。そして、習熟度による差がほとんど観察されない点においても、日本語学習者で観察された傾向とは異なっていた。

表 4. 評価副詞の延べ語数と一人当たりの平均出現頻度 (調査 1)

対象者		CHN			KOR			JPN			ENS
学習者の習熟度		B1-1	B1-2	B2	B1-1	B1-2	B2	B1-1	B1-2	B2	
人数		11	17	19	3	7	10	29	28	12	20
トピック	PTJ	7	12	11	0	3	1	2	2	1	10
	SMK	3	6	4	2	1	7	1	1	1	8
合計		10	18	15	2	4	8	3	3	2	18
一人当たりの平均出現頻度		0.91	1.06	0.79	0.67	0.57	0.8	0.10	0.11	0.17	0.9
		0.91			0.7			0.12			

- (2) a. ENS: really (5), maybe/ unfortunately/ successfully/ actually (2), evidently/ obviously/ naturally/ probably/ profusely/ perhaps/ possibly/ successfully (1)
- b. CHN: maybe (15), really (12), unfortunately (6), fortunately/ successfully (3), actually (2), accidentally/ obviously (1)
- c. KOR: really (6), maybe (3), fortunately (2), accidentally/ luckily/ surely (1)
- d. JPN: maybe (6), actually/ fortunately (1)

学習者に共通して観察されたのは、*maybe* の出現頻度の高さであり(cf. 藤本 2017)、これは日本語学習者において「たぶん」が多用されたこと(発表①)と共通する特徴である。

- (3) a. **Maybe**, he could sell something for the money he needed... (CHN, PTJ)
- b. ...a man wanted to go to sea with **maybe** friends uh but she didn't have... (JPN, PTJ)

3.2.3. 使用される副詞の種類と傾向

次に、使用される副詞の種類と傾向に差があるかを見る。発表②では、状態を描写する際、「日本語母語話者が副詞で様態を表すことが多いのに対し、日本語学習者は時間を表す傾向がある」という特徴が観察されたが、英語学習者ではどのような特徴が観察されるだろうか。調査では習熟度による差はほとんど観察されなかったため、全データをまとめ、次頁の表 5 に示す。表 5 から、時間副詞を使用する傾向は英語学習者でも同様に見られたが、日本語母語英語学習者(JPN)が副詞で様態を表す傾向は見られなかった。学習者全体と ENS との違いが目立つのは場所副詞であり(表 3 参照)、これには *out* などの使用の有無が関係する。一方、学習者間で異なる点として、KOR での様態副詞の割合の高さ、そして JPN での

時間副詞の占める割合の高さ(ago と then がその大部分。表 3 を参照)が指摘できる。

表 5. 使用された副詞の種類と延べ語数(調査 1)

対象者	人数	評価	様態	時間	場所	程度	追加等	連結 ³	その他	合計
CHN	47	43 (8.2%)	20 (3.8%)	244 (46.7%)	72 (13.8%)	88 (16.9%)	16 (3.1%)	30 (5.7%)	10 (1.9%)	522 (100%)
KOR	20	14 (9.0%)	17 (11.0%)	67 (43.2%)	14 (9.0%)	30 (19.4%)	4 (2.6%)	8 (5.2%)	1 (0.6%)	155 (100%)
JPN	69	8 (2.0%)	17 (4.3%)	268 (67.5%)	57 (14.4%)	24 (6.0%)	4 (1.0%)	17 (4.3%)	2 (0.5%)	397 (100%)
ENS	20	18 (7.7%)	17 (7.2%)	91 (38.7%)	55 (23.4%)	38 (16.1%)	4 (1.7%)	9 (3.8%)	3 (1.3%)	235 (100%)

4. 調査 2(意見陳述課題)

4.1. 調査対象

次に、調査 1 で得られた結果について、課題の影響を検討するため、意見陳述課題における副詞使用の傾向を見る。調査方法は次のとおりである。

調査に使用したコーパス: ICNALE, Spoken Monologues V 2.0⁶

表 6. 調査対象と参加者数(調査 2)

対象者		習熟度			合計
		B1-1	B1-2	B2	
学習者	中国語 (CHN)	48	78	10	136
	韓国語 (KOR)	15	43	36	94
	日本語 (JPN)	30	47	30	107
英語母語話者 (ENS others ⁷)					50

検索対象: Spoken Monologue 内の 2 つのトピック(大学生にとってのアルバイト・レストランでの禁煙)

全データ(2 つのトピックについてのそれぞれ 2 回のスピーチ)

検索方法と分析対象: 調査 1 と同様。

4.2. 英語学習者の副詞使用の特徴

学習者・母語話者における副詞の出現数と、一人当たりの平均出現頻度、異なり語数を次頁の表 7 に示す。調査 1 の結果(表 2)と比較すると、副詞の平均出現頻度は調査 2(表 7)の方がすべての対象者で高いが、各対象者間の差異は類似している。また、一人当たりの異なり語数については、JPN を除くすべてにおいて、調査 2 の方が低かったが、やはり各対象者間の差異は類似していた。このことは、副詞使用の頻度は課題によって影響を受けるものの、副詞使用の傾向は大きく影響を受けないことを示唆している。

⁶ Spoken Monologues は、学習者の独話によるスピーチデータであり、2 つのトピック(「大学生にとってのアルバイト」と「レストランでの禁煙」)について 5 つのスピーチ((1) Self introduction, (2) First speech about the part-time job, (3) Second speech about the part-time job, (3) First speech about the non-smoking, and (4) Second speech about the non-smoking)をそれぞれ 60 秒で行い、その内(2-4)のデータが含まれている。詳しくは、Ishikawa (2023)および ICNALE website (<https://language.sakura.ne.jp/icnale/modules.html#1>)を参照されたい。

⁷ 英語使用国に住む、英語教授歴のない、一般的な大人の英語話者。

表 7. 各話者データで観察された副詞の延べ語数と異なり語数(調査2)

対象者	CHN			KOR			JPN			ENS
	B1-1	B1-2	B2	B1-1	B1-2	B2	B1-1	B1-2	B2	
学習者の習熟度	B1-1	B1-2	B2	B1-1	B1-2	B2	B1-1	B1-2	B2	
人数	48	78	10	15	43	36	30	47	30	50
PTJ	407	731	89	70	238	201	218	182	188	345
SMK	533	886	130	87	277	325	232	196	182	437
合計	940	1617	219	157	515	526	450	378	370	782
一人当たりの平均出現頻度	19.58	20.73	21.9	10.47	11.98	14.61	15.0	8.04	12.33	15.64
	20.41			12.74			11.20			
異なり語数 (2トピック合計)	108	162	58	41	83	89	69	77	71	130
	191			132			126			
一人当たりの異なり語数	2.25	2.08	5.8	2.73	1.93	2.47	2.3	1.64	2.37	2.6
	1.40			1.40			1.18			

表 8 は使用された副詞について、上位 10 語までを示したものである。頻度の高い副詞については、対象者間でかなりの類似が見られた。表 3 との違いについては、タスクの影響が考えられる。

表 8. 出現数上位 10 語の副詞(調査 2)

CHN				KOR				JPN				ENS (英語母語話者)			
	副詞	出現数	割合		副詞	出現数	割合		副詞	出現数	割合		副詞	出現数	割合
1	very	372	13.4%	1	very	209	17.4%	1	very	265	22.1%	1	also	98	12.5%
2	also	326	11.7%	2	also	159	13.3%	2	also	98	8.2%	2	very	65	8.3%
3	more	126	4.5%	3	really	59	4.9%	3	completely	71	5.9%	3	really	46	5.9%
4	just	120	4.3%	4	more	49	4.1%	4	only	68	5.7%	3	just	46	5.9%
5	all	113	4.1%	4	then	49	4.1%	5	maybe	41	3.4%	5	then	44	5.6%
6	only	110	4.0%	6	completely	37	3.1%	6	much	39	3.3%	6	more	27	3.5%
7	maybe	102	3.7%	7	only	35	2.9%	7	too	34	2.8%	6	even	27	3.5%
8	really	84	3.0%	8	just	31	2.6%	8	more	33	2.8%	8	maybe	22	2.8%
9	then	69	2.5%	9	well	29	2.4%	9	actually	28	2.3%	9	only	19	2.4%
10	well	65	2.3%	10	too	26	2.2%	10	secondly	27	2.3%	9	as	19	2.4%
				10	maybe	26	2.2%	10	now	27	2.3%				

5. まとめと今後の課題

参考文献

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey N. Leech, Susan Conrad, & Edward Finegan (2021) *Grammar of Spoken and Written English*. John Benjamins Publishing Company.
- 藤本和子 (2017)「日本人英語学習者のモダリティ表現の使用について—“certainty”と“doubt”を表す副詞—」『英語英文学研究』81: 93-106. 創価大学.
- 藤本和子 (2018)「日本人英語学習者の「主張の制限」を表す副詞(句)の使用について」『英語英文学研究』83: 1-16. 創価大学.
- Gablasova, Dana, Vaclav Brezina, Tony Mcenery, & Elaine Boyd (2017) Epistemic stance in spoken L2 English: The Effect of task and speaker style. *Applied Linguistics*, 38(5): 613-637.
- Ishikawa, Shin'ichiro (2023) *The ICNALE Guide: An introduction to a learner corpus study on Asian learners' L2 English*. Routledge.
- Ogata, Takashi & Koichi Kawamura (2014) Asian learners' common overuse/underuse of basic prepositions and -ly adverbs: A study based on the ICNALE. *Learner Corpus Studies in Asia and the World 2*: 349-359.
- 投野由紀夫(編)(2007)『日本人中高生一万人の英語コーパス:中高生が書く英文の実態とその分析』小学館.